二〇一九年度

神奈川県公立高校入試問題

五〇分
一〇〇点

（注）解答欄にマス目（例：□□□）がある場合は、句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。

一

次の問いに答えなさい。

(ア) 次の1～4の各文中の――線をつけた漢字の読み方を、ひらがなを使って現代仮名遣いで書きなさい。

1 職場の人と親睦を深める。

2 緩衝地帯を通過する。

3 美術館に彫塑を搬入する。

4 新事業への進出を企てる。

1	2	3	4
			てる

(イ) 次のa～dの各文中の――線をつけたカタカナを漢字に表したとき、その漢字と同じ漢字を含むものを、あとの1～4の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

a 地域のシンコウに努める。

1 コウキの目にさらされる。
2 古代国家のコウボウを描く。
3 キョコウの中の真実を見つけ出す。
4 キュウコウした土地を活用する。

b ボクソウを刈る。

1 演説のソウコウを用意する。
2 カイソウごとに空調を管理する。
3 バンソウに合わせて歌う。
4 厳しい生存キョウソウを勝ち抜く。

c チョウジリを合わせる。

1 新しいチョウシャが完成した。
2 改善のチョウコウが見られる。
3 チョウボの管理を行う。
4 イチョウの調子を整える薬を飲む。

d 玉ねぎを細かくキザむ。

1 キソクを守ることは大切だ。
2 コクフンを加工して菓子をつくる。
3 失敗を重ねてしまいタンソクする。
4 ソッコク判断を下す。

(ウ) 次の例文中の――線をつけた「で」と同じ意味で用いられている「で」を含む文を、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

例文　本を読んで感想を書く。

1　上着を脱いで手に持つ。
2　あまりに立派で驚いた。
3　自転車で坂道をくだる。
4　五分で外出の準備をする。

(エ) 次の俳句を説明したものとして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

向日葵(ひまはり)の蕊(しべ)を見るとき海消えし　芝(しば)不器男(ふきお)

1　花の中心にある蕊へと視点を焦点化していくことで、光り輝く大海原のような向日葵畑から輝きが失われてしまった悲しみを感覚的に表している。
2　近景へと焦点を合わせていく映像的手法を用いることで、眼前の向日葵の印象を鮮明に浮き上がらせながら海の姿も意識されるように表現している。
3　一面に広がる向日葵畑の圧倒的な存在感に、まるでこちらへ迫ってくるような錯覚に陥って海にいることさえ忘れてしまったという感動を描いている。
4　太陽に向かい咲き誇っていた向日葵の花が蕊だけを残して枯れ果てたことで、向日葵畑の背後にある海の存在感すら消えうせたことを示している。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

昔、(注)孫叔敖(そんしゅくがう)といふ人、幼少のときに、外へ出(い)でて遊びければ、両頭の蛇とて、二つ頭のある蛇を見たり。日本にいふ日(注)ばかりのたぐひなるべし。そのときに、その子の母が、「なんぢはいかなる子細ありてか、1かくものを食はずして泣くぞ。」と問ひけるほどに、叔敖答へて曰(い)はく、「今日われ両頭のくちなは(注)を見ければ、明日まで命を延ぶべからず。」と言ひけるを、母もとより世に優れたる人なれば、外(ほか)のことを聞き入れずして、「まづその蛇はいづちにかある(どこにいるのか)。」と問ふ。叔敖が曰はく、「両頭のくちなはを見るものは必ず死すと、日ごろより聞き及びしゆゑに、他人のまたこれを見んことを恐れて、地に埋(うづ)みける。」と言ふ。母、このことばを聞きて曰はく、「2憂ふることなかれ、なんぢは死ぬまひぞや(あなたは死ぬことはないでしょう)。そのゆゑは、人として陰徳あれば陽報あり、天は高けれども、低(ひき)き地のことをよく聞けり、徳は不祥(注)に勝ち、(注)仁は(注)百禍(はくくは)を除く、といふことあれば、なんぢは死せぬのみならず、あまさへ楚国(そこく)におこらん(そればかりか楚の国で出世するだろう)。」と言ふ。成人して後に、はたして(注)令尹(れいゐん)といふ官人になれり。その国の民が、叔敖は蛇をさへ埋むほどの人なれば、偽りあるべからずとて、3そのことばをよく信じけり。

また、(注)秦(しん)の穆公(ぼくこう)、(注)駿馬(しゅんば)を失はれしとき、五人の盗人、この馬を殺して食らふ。穆公、五人を殺さずして、くすり酒をたまふ(お与えになった)。その後(注)晋(しん)と秦と戦あり。かの五人、命を惜しまず働く。穆公の曰はく、「陰徳陽報を得(う)とは、これこのいはれなり。」と。

(「実語教童子教諺解(じつごきょうどうじきょうげんかい)」より)

（注）　孫叔敖＝中国春秋（しゅんじゅう）時代（紀元前八〜前五世紀）の人物。
日ばかり＝蛇の一種。有毒とみなされていた。
くちなは＝蛇。
不祥＝災い。
仁＝思いやりの心。
百禍＝多くの災い。
令尹＝君主の政務を補佐する官位。
秦の穆公＝中国春秋時代の国である秦の君主。
駿馬＝足の速い、優れた馬。
晋＝中国春秋時代の国名。

(ア)　――線1「かくものを食はずして泣くぞ。」とあるが、「叔敖」が泣いている理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　有毒な蛇にかまれてしまったので、明日まで生きることはできないと恐怖を感じているから。
2　天の神とされている蛇を殺してしまったので、不吉なことが起きると不安を感じているから。
3　見たものは死ぬと言われている蛇を見てしまい、自分は今日中に死ぬと恐怖を感じているから。
4　不吉な蛇と遭遇してしまい、自分や母に災いが訪れるのではないかと不安を感じているから。

□

(イ)　――線2「憂ふることなかれ」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「叔敖」が日ごろから命あるものを大切にしていることは、天が知らなくとも「母」は知っているので、自分のあやまちを気に病む必要はないということ。

2　天は地上の出来事をよく知っており、人は日ごろの行いによって相応に報われるものだから、「叔敖」は自分の身を心配しなくてもよいということ。

3　「叔敖」は蛇を殺してしまったことを気にかけているが、誠意をもって蛇を埋葬したことを天は見てくれているので、悲しむ必要はないということ。

4　蛇を埋めてしまったことに不安を感じているようだが、日ごろからよい行いをしている「叔敖」を蛇も許してくれるから、こわがらなくてよいということ。

□

(ウ)　――線3「そのことばをよく信じけり。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「叔敖」は蛇に立ち向かうほど勇敢な行動をとれる人物であるから、何か災いが起きても自分たちを助けてくれるだろうと、「民」が信用しているということ。

2　「叔敖」は人々の命を守るためには手段を選ばないような人物であるから、戦が起きても自分たちを見捨てるわけがないと、「民」が信用しているということ。

3　「叔敖」は自分の命よりも蛇の命を優先するような人物であるから、自分たちを正しい道へと導いてくれるに違いないと、「民」が信じているということ。

4　「叔敖」は人々に災いが及ぶことのないよう気づかえる人物であるから、自分たちをだますような行いはするはずがないと、「民」が信じているということ。

(エ)　本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「叔敖」が他人を思いやり蛇を地に埋めたことで信望が集まったように、「穆公」には「盗人」を許し命を助けた「陰徳」によって、晋との戦でその「盗人」が活躍するという「陽報」があった。

2　「叔敖」が「母」のために蛇を殺したことで人々から非難されたように、「穆公」も「盗人」の罪を不問にした「陰徳」により、晋との戦でその「盗人」に苦しめられるという「陽報」を受けた。

3　「母」の予言どおり「叔敖」は日ごろの行いが認められて令尹となったが、「穆公」にも「盗人」に駿馬を与えた「陰徳」が原因で、その駿馬が晋との戦に勝利をもたらすという「陽報」が訪れた。

4　「母」の言ったとおり「叔敖」は命が助かっただけでなく令尹になることもできたが、「穆公」は「盗人」の罪を不問にした「陰徳」が災いして、戦が起こるという「陽報」を招いてしまった。

□

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

> 十九世紀末、フランスのパリでは浮世絵がブームになり、「重吉（シゲ）」の仕える「林忠正」は、画商として成功を収めていた。一方、「重吉」らの友人であるオランダ人画家の「フィンセント」は、新天地を求めてフランス南部のアルルに旅立った。ある日、「重吉」は、同業者から見下した態度をとられた「忠正」に従い、パリを流れるセーヌ川へ出た。

ポン・ヌフ――「新しい橋」という名前は十七世紀初頭に橋の完成とともにつけられてからずっと変わることはなかった――は、セーヌに浮かぶ島、シテの西側の先端を横切って、右岸と左岸をつないでいる。橋の中心に向かって石畳がかすかなカーヴを描き、橋の両側にはガス灯の柱が一定間隔で並んでいる。ちょうど橋脚の真上にふたつの灯柱が立ち、そのあいだには半円形の欄干と同じく半円形の石造りのベンチが一体で造られている。優雅なかたちのベンチは、ほぼ三百年もの昔から、セーヌを眺めるために立ち止まる人の到来をいつも待っていた。

橋のちょうど真ん中あたりで、忠正は、吸い寄せられるように半円形の欄干に近づいていった。重吉も、その後に続いて、船の舳先のような欄干の近くに佇んだ。

心地よい川風が頬をかすめて通り過ぎてゆく。夜九時を過ぎ、ようやく太陽が退場しようとしている。その代わりに黄昏が静かに迫っていた。

重吉は、日本から遠く離れた異国の地、パリに、こうして忠正とふたりでいて、セーヌに架かる橋の真ん中に立っている不思議を思った。

確かに、自分は、日本にいたとき、この街にこうしていることを夢みていた。――ということは、いま、自分は、あの頃の夢の中で生きているのだろうか。

1ふと、フィンセントのことを思い出した。

日本へ行きたいとフィンセントは言っていた。夢の国で生きてみたいのだと。

無謀な夢は、かなわなかった。その代わりに、彼はアルルへ行った。そこに自分の理想郷を創ることを夢みて。——その夢もまた、かなわなかったけれど。

それでも、彼は描いたのだ。あんなにも激しく、せつなく、自分自身を画布にぶつけて。アルルから次々に送られてきた彼の絵の切実さ、明瞭さ、まぶしさ。アルルの陽光を吸って命を与えられた絵。そんな絵を描くことが、彼のほんとうの夢だったのではないか。

(注)テオとともにアルルにフィンセントを見舞ったとき、彼はうわ言のようにつぶやいていた。——自分は「いちばん描きたいもの」を、まだ描いていないんだと。

とすれば、彼はまだ見果てぬ夢を見ているのだろうか。「いちばん描きたいもの」を描き上げたとき、そのときこそ、画家としての彼の夢がかなったといえるのだろうか。

「なあ、シゲ。……お前、この街をどう思う?」

忠正の声がした。重吉は、川面（かわも）に放っていた視線を石の欄干にもたれている忠正に向けた。

「そうですね、僕にとっては……現実のものとは思えない、夢のような街です。」

重吉は、心に浮かぶままをすなおに口にした。

「林さんと(注)日本橋（にほんばし）の茶屋で話をしたときのこと、いまでもときどき思い出します。おれはパリに行く……と林さんがはっきり言ったあのとき、なんとなく、パリの街なかを流れているセーヌ川が、(注)隅田川（すみだがわ）に重なって見えたような……。」

「なんだそれは。」忠正が笑った。

「セーヌ川と隅田川じゃ、まったく違うじゃないか。」

「わかってますよ。」重吉も苦笑した。

「でも、あのとき……なぜだかわからないけれど、いまの僕たちの姿が、ほんのいっとき、見えていたような……そんな気がします。」

それからまた、しばらくのあいだ、ふたりは黙って川面をみつめていた。やがて、忠正が独り言のようにぽつりと言った。

「つれないよなあ。……こっちはさんざん苦しんで、もがいて、あがいているっていうのに……いつだって、知らぬふりをして流れていやがる。」

重吉は、顔を上げて忠正を見た。2その横顔には薄暮のような微笑が浮かんでいた。

「初めてこの街に来たときは、何をやってもからかわれたし、馬鹿にされたもんだ。『R（エール）』の発音がなってないとか、真っ平らで引っかかりのない顔だとか、背が低いから（注）燕尾服（えんびふく）なんぞ似合わないだとか、日本は未開の地で野蛮な人間が住んでいるだとか……まあ、散々だった。」

馬鹿にされればされるほど、西洋人に引けをとるまいと、歯を食いしばって我慢し、フランス語の勉強を重ね、（注）ルーブルへ行って片っ端から西洋絵画を見まくった。どんどん外に出て、人に会った。自分は日本という国を背負っているのだ、絶対に負けてはならぬ、と心に誓っていた。

それでもくやしさをぬぐい切れないときには、セーヌ川のほとりをひとりで歩いた。どこまでも、いつまでも。歩き続けるうちに朝になってしまったこともあった。くやしいことは、全部、この川に捨ててきた。それらはとるに足りない芥（あくた）になって、薄緑色の流れに消されていった。

この街をセーヌが流れている。その流れは決して止まることはない。どんなに苦しいことがあっても、もがいても、あがいても……この川に捨てれば、全部、流されていく。そうして、空っぽになった自分は、この川に浮かぶ舟になればいい。――あるとき、そう心に決めた。たゆたいはしても、決して流されることなく、沈むこともない。……そんな舟に。

「そんな戯言（たわごと）を、アルルに旅立つまえのフィンセントに話したんだ。」

重吉は、えっ、と思わず声を漏らした。

「フィンセントに……？」

忠正はうなずいた。

「アルルに行く前日だったかな。お前が留守のあいだに、フィンセントが店に来たんだ。アルルに行くきっかけを作ってくれたからと、わざわざ礼を言うために。」

短い時間、ふたりは会話を交わした。忠正は、アルルに行ったら自分が描きたいと思う絵を存分に描くようにと助言した。

フィンセントは黙って聞いていたが、突然、告げた。

――3いちばん描きたいものを、私は、永遠に描くことができません。

不思議に思った忠正は、それは何かと尋ねた。フィンセントは、すぐには答えようとしなかったが、やがて打ち明けた。

――セーヌです。

――セーヌ?

すぐにでも描けそうなモティーフ（注）だ。実際、印象派（注）の画家たちの多くが画題に選んでいる。なぜ永遠に描けないなどと言うのだろう。

馬鹿ばかしい理由ですが、と前置きして、フィンセントは打ち明けた。

テオを頼ってパリに出てきて、夏を迎えた頃、夕暮れどきにセーヌ河畔をそぞろ歩きした。あふれる光とまぶしさに目を細めていると、まぶたの裏が黄色くなるような気がした。

黄色いセーヌだ、と急に思いつき、次の日、ポン・ヌフの真ん中にイーゼル（注）を立て、黄色と緑の絵の具を大量に準備して、「黄色いセーヌ」を描こうとした。すると、すぐに警官がやって来て、ここで絵を描いてはいけない、と忠告した。その日は仕方なく帰ったが、次の日、あらためて出かけていった。が、同じように警官が来て、同じことを言われた。

フィンセントは、何もしていないのに、セーヌに架かる橋の上でイーゼルを立てることを禁止されてしまった。この不名誉な出来事を、テオに話すことはできなかった。

フィンセントは打ちのめされた。セーヌに、パリに拒絶された、そんな気がした。

その日から、どうやったらパリ以外のところで絵を描いて生きていけるか、そればかりを考えて、二年間過ごしてきた。日本へ行くことがかなえばそれがいちばんよかったはずだが、それでも「自分だけの日本」をみつけにアルルへ行けることになって、ほっとしている。自分はこれから、セーヌだのパリだのにこだわることなく、アルルで自由に絵を描こうと決めている。――そう言って、フィンセントは話を締めくくった。

「その話を聞きながら、おれは気づいたんだ。フィンセントは、ほんとうはいつまでもパリにとどまりたいと願っている。けれど、この街にどうしたって受け入れられないとわかってしまったから、出ていく決心をした。……だとしたら、さびしすぎるじゃないか。」

そんな思いを胸に秘めたまま、アルルへ行ってはいけない――。

忠正は、フィンセントに言った。――セーヌに受け入れられないのなら、セーヌに浮かぶ舟になればいい、と。

嵐になぶられ、高波が荒れ狂っても、やがて風雨が過ぎれば、いつもの通りおだやかで、光まぶしい川面に戻る。

だから、あなたは舟になって、4 嵐が過ぎるのを待てばいい。たゆたえども、決して沈まずに。

――そしていつか、この私をはっとさせる一枚を描き上げてください。

そのときを、この街で待っています。

5 忠正の言葉を追いかけながら、重吉は、遠い川面に視線を投げた。

目頭が、どうしようもなく熱くなった。――なぜかはわからない。けれど、涙がこぼれてしまいそうだった。

滔々（とうとう）とセーヌは流れていた。苦しみも、悲しみも、やるせなさも、すべてをとるに足りない芥に変えて、とどまることなく流れていた。

（原田（はらだ）マハ「たゆたえども沈まず」より。一部表記を改めたところがある。）

（注）テオ＝「フィンセント」の弟。
日本橋＝現在の東京都の地名。
隅田川＝現在の東京都を流れる川。
燕尾服＝男性の洋装の礼服。
ルーブル＝ルーブル美術館のこと。パリにある国立の美術館。
モティーフ＝作品の主題。ここでは、描写する対象のこと。
印象派＝十九世紀にフランスで起こった芸術家の一派。
イーゼル＝画布などを支えて固定する道具。

(ア)　――線1「ふと、フィンセントのことを思い出した。」とあるが、そのときの「重吉」の気持ちを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　夢みていたパリにいることが今一つ実感できない一方で、「フィンセント」は「いちばん描きたいもの」を描き上げれば、夢がかなったといえるのだろうかと思いを巡らせている。
2　理想の地だったパリに立ってはいるものの、「フィンセント」のような「ほんとうの夢」が自分にはまだないということに思い至り、早くみつけなければならないと思っている。
3　希望通りパリに来られた自分は非常に恵まれていると思う一方で、日本にもアルルにも行くことがかなわず、パリで失意の底に沈んでいる「フィンセント」に思いをはせている。
4　あこがれのパリに立って日本をなつかしく思い出し、「フィンセント」の日本への思いに共感する一方で、それはやはり「無謀な夢」であり故郷がいちばんだと思っている。

(イ)　――線2「その横顔には薄暮のような微笑が浮かんでいた。」とあるが、そのときの「微笑」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　異国に受け入れられずひとりもがいてきたことは遠い記憶であり、パリを離れる自分にはもはや無関係だと開き直った微笑。
2　異国で経験してきた苦しみやあせりはすべてセーヌに捨ててきたので、もうパリで悩むことはないだろうという安心に満ちた微笑。
3　異国に受け入れられようともがき続けた結果、日本人でありながらパリで成功したことによって得た自信をみなぎらせた微笑。
4　異国での苦しみやくやしさにやりきれない思いをすることもあるが、これからもパリで生きていこうという覚悟もにじんだ微笑。

(ウ)　――線3「いちばん描きたいものを、私は、永遠に描くことができません。」とあるが、ここでの「フィンセント」の気持ちをふまえて、この部分を朗読するとき、どのように読むのがよいか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　正当な理由もなくセーヌを描くことを禁じたパリの警官に怒りを抱いており、同じよそ者である「忠正」に共感してほしいと思っているので、強い調子で読む。

2　外国からパリに来た多くの印象派の画家たちが、苦労もなくセーヌを描き次々と世に認められていることに劣等感があるので、自分の力不足を恥じるように読む。

3　パリを離れることは決めているものの、未練もあるというほんとうの気持ちを「忠正」には聞いてもらいたいという思いもあるので、不意に打ち明けるように読む。

4　パリに来たばかりの頃は自分と同じように苦労をしていた「忠正」もいまでは成功者であり、自分の気持ちを理解できないと思っているので、皮肉をこめて読む。

□

(エ)　――線4「だから、あなたは舟になって、嵐が過ぎるのを待てばいい。」とあるが、そのときの「忠正」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「フィンセント」にほんとうの気持ちを打ち明けられ、かつての自分と同じく、嵐の中であっても力強く浮かび続ける「舟」のように、諦めずパリに残っていてほしいと訴えかけている。

2　「フィンセント」のほんとうの気持ちを察して、自分の体験と重ね、嵐に揺られはしても決して沈まない「舟」のように、アルルに行っても希望を捨てずにいてほしいと願っている。

3　「フィンセント」のほんとうの気持ちを見抜き、かつての自分と重ね合わせながら、嵐の中を勇敢に突き進む「舟」のように、前向きな気持ちでパリを旅立ってほしいと元気づけている。

4　「フィンセント」にほんとうの気持ちを告げられ、自分はくじけてしまったが、嵐が過ぎ去るのをじっと待つ「舟」のように、何があっても諦めずセーヌを描いてほしいと励ましている。

(オ)　――線5「忠正の言葉を追いかけながら、重吉は、遠い川面に視線を投げた。」とあるが、そのときの「重吉」の気持ちを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「忠正」から、「フィンセント」が警官に受けたひどい仕打ちを聞かされ、よそ者に冷淡なパリで自分もくやしい思いをしたことがよみがえり、涙が出そうになっている。

2　「忠正」から、「フィンセント」の本心を聞かされ、新たな夢を求めてアルルに行ったものと単純に考えていたことが思い出され、自分の未熟さに嫌気がさしている。

3　「忠正」から、「フィンセント」に伝えられた言葉を聞き、自分の知らないところでふたりが夢のために様々な思いを抱えていたことを知り、大きく心を動かされている。

4　「忠正」から、「フィンセント」がほんとうに描きたかったものはセーヌであり、それを諦めざるを得なかった事情を聞き、何もできない自分の無力さに失望している。

□

(カ)　この文章について述べたものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　画商としての自覚に欠ける「重吉」に対して画家の思いや苦悩を伝えようと「忠正」が懸命に話す場面を、「船の舳先のような欄干」を舞台にして、ふたりの新しい船出を象徴的に描いている。

2　「忠正」や「フィンセント」の心労を知った「重吉」が、あこがれていたパリへ徐々に失望していく過程を、よそ者に冷淡なパリを象徴する「ポン・ヌフ」を背後に感傷的に描いている。

3　日本人が異国の地で生きていくことの苦労を「重吉」に伝えようとする「忠正」の姿を、ふたりの思い出の地である「隅田川」と「セーヌ」とを重ね合わせることで、感動的に描いている。

4　「忠正」と「フィンセント」の苦悩を知り、「重吉」にとってパリの地で生きることに現実味が帯びてくる様子を、すべて受け入れるように流れる「セーヌ」の姿とともに印象的に描いている。

四　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

近年、機械でもできる単純作業はAI(注)に任せ、人間はクリエイティブ(注)な仕事に集中すればいい、という観点で職場へのAI導入が語られている。しかし、アメリカの社会学者リチャード・セネットが『それでも新資本主義についていくか』で論じるように、1単純な事務作業などのルーティンワークはむしろ個人を守ってくれるものと言える。「クリエイティブな仕事」と言うと聞こえはいいが、実際のところ、クリエイティブな作業には、どこまでやってもゴールに到達することはないというハードさがつきまとう。ルーティンワークに携わる方が明らかに負担は軽いし、誰もが「芸術家」として生きる厳しさに耐えられるわけでもない。

それでも、もしかしたら「あたらしい技術」の進化によって、たとえば人間の能力そのものが飛躍的に高められ、皆が「人的資本」としての自らの価値を向上させて活躍できる時代が到来するかもしれない。　A　、今の技術のあり方を見る限り、「あたらしい技術」を使いこなし、自分が「主人公」となって活躍しているという感覚は、単なる錯覚ということになりそうだ。このまま「あたらしい技術」が進化していくならば、「主人公」は人間ではなくテクノロジー(注)の側となるだろう。やがて私たちは「機械がまだ機械のたのしさを持っていた時代　科学が必ずしも人を不幸にすることは決まってないころ　そこはまだ世界の主人公は人間だった」という『天空の城ラピュタ』(注)のキャッチコピーそのままの世界を目(ま)の当たりにするかもしれない。

「あたらしい技術」は、既に、私たちと融合を始めている。スマホでもネットでも、2「あたらしい技術」は私たちが使う「道具」というより、今やその中にどっぷりと浸(つ)かる「第二の自然」だ。道具であれば、使うか否(いな)かを決める主体は私たちだが、そうした旧来のビジョ(注)ンでは、既に「ここにあるもの」として、私たちと一体化しつつある「あたらしい技術」に対応できない。むしろ、道具だと思っていた「技術」が主体で、私たちが客体になるのが、「あたらしい技術」なのだ。

▼車の自動運転を例に、この主体と客体の関係を考えてみよう。AI研究者の中には、3現在の自動運転技術のことを「物足りない」と言う人もいる。その理由は、今、自動運転と呼ばれているものが本当の「自動」ではないからだ。自動になったのは運転という作業に限定され、どこに行くかという目的地は運転する人間が入力しないといけない。つまり、今の自動運転はいまだ「道具」であり、運転する人間が主体となって、自動運転という便利な道具を使っていると言える。

「本当の」自動運転であれば、車に乗り込んだだけで、車は目的地に向かって走り出す。車に乗った者の行動履歴やカレンダー機能等のデータがすべてＡＩによって解析されているので、いちいち入力しなくても、「今日は○月○日○曜日の○時だから、この人の行先(ゆきさき)は△△だ。」ということを、車がちゃんと把握しているわけだ。車に乗った者が自分でアクションを起こさなければならないのは、何かイレギュラー(注)な予定が入ったときだけであり、「いつもの目的地に向かおうとしているな。変更を指示してやらなくちゃ。」といった具合に修正してやればよい。こうした「本当の」自動運転においては、アクションを起こす主体は自動車であり、人間はただリアクションするだけの客体になる。［Ｂ］、主体と客体の関係が転倒するのだ。

現在の自動運転が「本当の」自動運転になるのは、技術的なことだけで言えば、ほんのワンステップである。「何もしないで、車が勝手に目的地に連れて行ってくれるなんて、すごく便利じゃないか。」と思うだろうか。

だが、人間が起点という意味での主体でなくなるということは、単に「便利になった」というだけでは終わらない。この問題は、思想的レベルというより、もっと身近で具体的なところに及んでくる。近代以降の社会の枠組みは、まさに、人間は主体的な意志を持つ存在であるという前提を基につくられてきた。

「あたらしい技術」がもたらす主体と客体の転倒は、4そうした枠組みそのものに根本的な変革を迫ることにもなりかねない。

たとえば、犯罪者に刑罰を与えることを正当化するロジック(注)のひとつに、応報説と呼ばれるものがある。応報とは「因果応報」の応報だが、要するに、個々人には自由意志があるということを前提に、犯罪行為をしないという選択もできたはずなのに犯罪行為をしてしまったというのは、その人がそういう意志を持ったからであり、だから責任の所在はその人にある、という論理だ。▲

では、「自動」運転で事故が起こった場合、責任は誰が負うことになるのだろうか。今までであれば、事故の責任をとって処罰されるのは車を運転していた人間、というのが社会のルールだった。なぜなら、主体である運転者には、事故を起こさない選択ができたにもかかわらず、事故を起こしてしまったからである。しかし、本当の「自動」運転の主体は、もはや車に乗っている人間ではないので、現在の法律では対応できないということになってしまう。

私たちの主体的な意志を前提としない技術が世の中を覆っていったとき、こうした問題は法律にとどまらず、マーケティング(注)から政治の分野に至るまで、社会のあらゆるところで齟齬(そご)(注)や混乱を生じさせていくだろう。どんなに「便利になる」と言われても、私たちが「あた

らしい技術」に不安を抱くのは、それによって、これまでの社会の枠組みや人間という存在そのものが大きく揺らぐことを、どこかで感じているからかもしれない。

「あたらしい技術」によって、今までにない社会が到来すること自体は明らかであり、私たちは、その入口に立っているのだと言える。もはやこれまでの価値観ではやっていけないし、先の見えない時代を生き抜くための対応策が求められている。しかし、5「それなら、なおさら『人的資本』としての自分の価値を高めなければ。」などと考えない方がいい。個人の能力を高める意義を否定はしないが、「あたらしい技術」がもたらす「あたらしい社会」においては、どんなに一所懸命に自らの「人的資本」の価値を高めようとしても、疲弊するばかりということになるだろう。そんなふうに自分のことにだけ関心を向けるのではなく、むしろ自分たちを取り巻く身近な人々やそこに生きる社会との、あるいは物理的な環境や技術との関係をどのように築いていくかに、もっと目を向けることが必要なのだ。

その時、ことさらに「あたらしい技術」の脅威に警鐘を鳴らすだけでは、「何だか怖い」という不安を掻き立てるだけに終わってしまうし、かといって「あたらしい技術」がバラ色の未来をもたらすという楽観論も、技術が悪用される可能性をあまりにも軽視しているという点で、どこか胡散臭い。

確かなことは、6私たちがとるべき態度は、定かではない未来の予測に過剰に反応して右往左往することではない、ということである。どんなに「変わって欲しくない」と願っても、これからの社会は変化せざるを得ないだろう。だとしたら、どのように変わって欲しいのか、そのビジョンを思い描くことこそが実践的な解につながっていくはずだ。

そのためには、今「あたらしい技術」が社会をどう変えようとしているのかを知らなければならない。

（堀内進之介「人工知能時代を〈善く生きる〉技術」より。一部表記を改めたところがある。）

（注）　ＡＩ＝人工知能。
クリエイティブ＝創造力に富んださま。
テクノロジー＝科学技術。
天空の城ラピュタ＝一九八六年公開のアニメーション映画。
ビジョン＝見通し。展望。
イレギュラー＝通常とは異なるさま。
ロジック＝論理。
マーケティング＝商品の販売を促進するための活動。
齟齬＝食い違い。

(ア)　本文中の［Ａ］・［Ｂ］に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　Ａ　おそらく　Ｂ　しかし
2　Ａ　たしかに　Ｂ　たとえば
3　Ａ　だが　Ｂ　つまり
4　Ａ　もちろん　Ｂ　むしろ

［　］

(イ)　――線1「単純な事務作業などのルーティンワークはむしろ個人を守ってくれるものと言える。」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　ルーティンワークはＡＩの導入により精度が上がり、効率も向上するため、負担が軽くなるから。
2　ルーティンワークは仕事の範囲が明確なため、際限なく取り組む必要はなく、負担が軽いから。
3　ルーティンワークは責任がある仕事のため、やりがいが感じられ、個人の価値が高められるから。
4　ルーティンワークは同じ作業を繰り返すため、自然と技術が高まり、個人の価値も向上するから。

(ウ)　――線2「『あたらしい技術』は私たちが使う『道具』というより、今やその中にどっぷりと浸かる『第二の自然』だ。」とあるが、その説明として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「あたらしい技術」は自然に取って代わろうとしており、自然を改変する「道具」というより、人間が生きていくためになくてはならないものとして存在しているということ。
2　「あたらしい技術」は使い方次第では人間を不幸にするおそれがあり、人間の生活を豊かにするための「道具」というより、危害を加えかねない存在となっているということ。
3　「あたらしい技術」は人間が意志を持って使用する「道具」というより、使用しているという実感がなくなるほど当たり前のものとして、身近に存在しているということ。
4　「あたらしい技術」は人間にとって便利な「道具」というより、人間を「道具」のように扱い、知らず知らずのうちに人間を支配するような存在となっているということ。

(エ) ――線3「現在の自動運転技術のことを『物足りない』と言う人もいる。」とあるが、そのことについて筆者はどう述べているか。その説明として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 運転という作業のみが自動化されているに過ぎないという考え方に対して、すべてが自動化されると人間の立場が主体から客体へと変化してしまうため、手放しで喜ぶことはできないと考えている。

2 現在の技術では不測の事態が起きた際には人間の判断に頼らざるを得ないという考え方に対して、今後はその判断の機会さえ奪いかねないため、人間の主体性を否定する危険な技術だと恐れている。

3 人間の指示がなくても目的地まで自動で移動する技術にはほど遠いという考え方に対して、現在の技術とはわずかな差であり、自動車が主体的に目的地を判断する時代は間近だと心待ちにしている。

4 「道具」を使用する主体の地位から人間を転落させるには至らないという考え方に対して、不測の事態に対応できるのは人間だけであり、主体と客体の転倒などあってはならないと警戒している。

(オ) ――線4「そうした枠組みそのものに根本的な変革を迫ることにもなりかねない。」とあるが、筆者がそのように述べる理由を説明した次の文中の Ⅰ ・ Ⅱ に入れる語句として最も適するものを、本文中の▼から▲までの中から、 Ⅰ については**六字**で、 Ⅱ については**五字**でそれぞれ抜き出し、そのまま書きなさい。

現代の社会は、人間の Ⅰ を前提につくられているため、「あたらしい技術」によって起きた事故に対する Ⅱ が特定できなくなるなど、社会のあらゆる場面で対応の困難な事態が生じるおそれがあるから。

Ⅰ

Ⅱ

(カ)　――線5「『それなら、なおさら「人的資本」としての自分の価値を高めなければ。』などと考えない方がいい。」とあるが、筆者がそのように述べる理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「あたらしい技術」のもとでは、人間が主体であり続けることは困難であるため、従来のやり方では個人の職業的な能力を向上させようとしても消耗するだけだから。
2　「あたらしい技術」に合わせて社会の環境が整備されなければ、いくら個人の職業的な能力を高めても、それを発揮するための場がないので無駄になってしまうから。
3　「あたらしい社会」では個人の職業的な価値を高めようとするとかえってその限界が露呈されるため、無力感ばかりが意識され、他者へ依存するようになるから。
4　「あたらしい社会」では人間の能力そのものが飛躍的に高まるため、個人の職業的な価値を高めようとする努力は報われず、意味を見いだせなくなってしまうから。

(キ)　――線6「私たちがとるべき態度は、定かではない未来の予測に過剰に反応して右往左往することではない」とあるが、筆者は「私たちがとるべき態度」についてどのように述べているか。その説明として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　「あたらしい技術」によって社会がますます便利になっていくという現実を全面的に受け入れ、よりよい社会を目指して、一人ひとりが科学技術の発展に貢献する必要がある。

2　社会が変化することは確実だと認識した上で、「あたらしい技術」が社会へもたらす影響について知り、今後のよりよい社会のあり方について考えていくことが重要である。

3　これからの社会では、主体と客体の転倒をもたらす「あたらしい技術」の重要性が増していくことは間違いないので、個人の能力を高めることに専念することが大切である。

4　「あたらしい技術」によってもたらされる社会の変化を食い止めるためには、小さな変化も見逃さないよう、様々な脅威に目を光らせながら柔軟に対応することが大事である。

(ク)　本文について説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　ＡＩの職場への導入が人間の働き方にどのような影響を及ぼすのか述べた上で、その働き方の変化が人間の能力を飛躍的に向上させていく可能性について、「人的資本」という観点から論じている。

2　科学技術が人間にとって便利な「道具」から、「主体と客体の関係」を転倒させてしまうほどの存在へと進化していくことへの期待感を、映画のキャッチコピーを引き合いにしながら論じている。

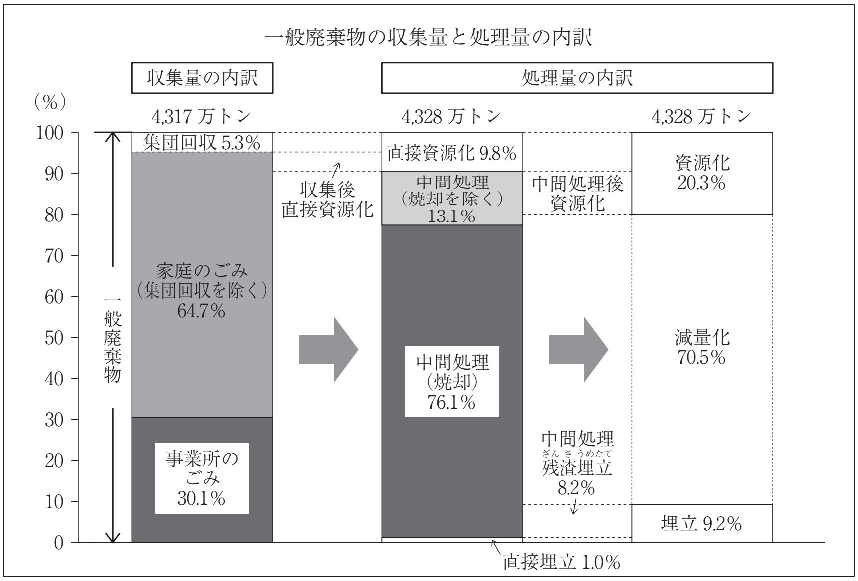
3　科学技術の進化によってもたらされる「あたらしい社会」の具体的な姿を、車の自動運転技術を例に説明し、希望や幸福に満ちた未来を実現するための生き方を模索していくべきだと論じている。

4　人間と一体化しつつある「あたらしい技術」によって社会がどう変わろうとしているのか説明した上で、個人の能力よりも周囲や社会などとのかかわり方に、もっと関心を向けるべきだと論じている。

五

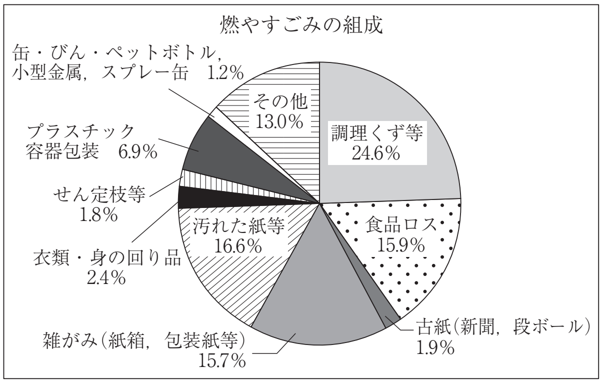
中学生のAさん、Bさん、Cさん、Dさんの四人のグループは、「総合的な学習の時間」にリサイクルの現状と課題について調べ、話し合いをしている。次の図、表、グラフと文章は、そのときのものである。これらについてあとの問いに答えなさい。

図



環境省「一般廃棄物の排出及び処理状況等（平成 28 年度）について」より作成。
図の百分率で示された数値は，四捨五入しているため，合計が 100%にならないことがある。

グラフ



京都市「新・京都市ごみ半減プラン」（平成 27 年）より作成。
燃やすごみの合計は約 21 万トン。

表

容器包装のリサイクル状況

ペットボトル	83.9%
プラスチック容器包装	46.6%
ガラスびん	71.0%
紙製容器包装	25.1%
飲料用紙容器	44.3%
段ボール	96.6%
スチール缶	93.9%
アルミ缶	92.4%

3R 推進団体連絡会「容器包装 3R 推進のための自主行動計画 2020 フォローアップ報告（2016 年度実績）」より作成。

Aさん　本日は、リサイクルの現状と課題について考えてみましょう。環境省によると、一般廃棄物の多くは中間処理によって大幅に減量化され、残りかすである残渣（ざんさ）は埋立（うめたて）によって処理されているそうです。それでは、リサイクルの現状はどうなっているのでしょうか。

Bさん　それを考えるために、図を見てみましょう。「集団回収」とは、自治体が実施している資源回収とは別に、町内会や学校ＰＴＡなどの地域団体が行っている自主的な資源の回収をいいます。また、「資源化」は、一般廃棄物から資源としてリサイクルされたものを示しています。

Cさん　集団回収も合わせると、家庭のごみが一般廃棄物の七割を占めているのですね。また、一般廃棄物の収集量や処理量に注目すると、［　　　］ことがわかりますね。

Dさん　リサイクルの現状については、一般廃棄物の収集量のうち、二〇・三パーセントが最終的に「資源化」されているということですね。このリサイクル率は、環境省によると近年二〇パーセント台で推移しているそうです。

Aさん　では、少しでもリサイクル率を向上させるために私たちにできることは何でしょうか。

Cさん　表を見てください。平成九年四月から本格施行された「容器包装リサイクル法」によって、家庭から出るごみのうち、分別収集の対象となったもののリサイクル状況です。

Bさん　対象によって算出方法が異なるので単純に比較はできませんが、リサイクルされている割合（わりあい）の高いものと低いものがあるようですね。

Dさん　ということは、これらのうち割合の低いもののリサイクルを進めていけばよいのでしょうね。

Bさん　そうですね。ここで、グラフも見てください。グラフは燃やすごみの内容物を京都市が調査した結果です。「雑がみ」とは、ミックスペーパーとも呼ばれ、その多くは表にある「紙製容器包装」のことです。

Dさん　本来は分別するべきものまで、こうして燃やすごみとして捨てられているのですね。汚れた紙のようにリサイクルできないものはともかく、「混ぜればごみ、分ければ資源」ということばの通り、リサイクルできるものはリサイクルにまわすことが必要ですね。

Aさん　これまでの話を総合すると、表とグラフから読み取った内容から、リサイクル率を向上させるためには、［　　　］ことが重要だ

と考えられます。

Cさん　当たり前のことですが、そうしたことの積み重ねが重要なのですね。

Dさん　そうですね。また、リサイクルだけでなく、そもそもごみを出さないように無駄な消費を抑えるリデュースや、繰り返し使うリユースも重要です。これらリデュース、リユース、リサイクルの頭文字をとって「3R」と呼ぶそうです。本日の話し合いをきっかけに、3Rを意識して、限りある資源をもっと大切にしていきたいと思いました。

(ア)　本文中の□に入れるものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　一般廃棄物として収集されたごみの多くは焼却されており、焼却による「減量化」が一般廃棄物の半分近くを占めている

2　収集された一般廃棄物のうち、中間処理を経ない「収集後直接資源化」量は「中間処理後資源化」量の約二倍である

3　「埋立」量のほとんどは「中間処理残渣埋立」量が占めており、一般廃棄物収集後の「直接埋立」量の十倍以上である

4　地域団体による「集団回収」量と「収集後直接資源化」量とでは、「収集後直接資源化」量の方がわずかに少ない

□

(イ) 本文中の［　　］に適する「Aさん」のことばを、次の①～④の条件を満たした**一文**で書きなさい。

① 書き出しの［リサイクル率を向上させるためには、］という語句に続けて書き、文末の［ことが重要だと考えられます。］という語句につながるように書くこと。

② 書き出しと文末の語句の間の文字数が**二十字以上三十字以内**となるように書くこと。

③ 表とグラフから読み取った具体的な内容に触れていること。

④ 「分別」「資源」という二つの語句を、どちらもそのまま用いること。

リサイクル率を向上させるためには、□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□ことが重要だと考えられます。

〈Note〉

二〇一九年度 神奈川県公立高校入試問題

一

解答

(ア) 1、しんぼく　2、かんしょう　3、ちょうそ　4、くわだ(てる)　(イ) a、2　b、1　c、3　d、4　(ウ) 1　(エ) 2

解説

(イ) a、「振興」と書く。1は「好奇」、2は「興亡」、3は「虚構」、4は「休耕」と書く。b、「牧草」と書く。1は「草稿」、2は「階層」、3は「伴奏」、4は「競争」と書く。c、「帳尻」と書く。1は「庁舎」、2は「兆候」、3は「帳簿」、4は「胃腸」と書く。d、「刻」と書く。1は「規則」、2は「穀粉」、3は「嘆息」、4は「即刻」と書く。

(ウ) 接続助詞の「て」がにごったもの。2は形容動詞「立派だ」の連用形の活用語尾。3は自転車という手段を、4は五分という時限を表す格助詞の「で」。

(エ) 向日葵の向こうに海が広がっている情景を詠んでいる。「向日葵の蕊」という間近に見ているものと、「海」という遠くに見えるものとが対比されていることをおさえる。

二

解答

(ア) 3　(イ) 2　(ウ) 4　(エ) 1

解説

(ア) 「両頭のくちなはを見るものは必ず死す」と聞いていた叔敖は、その蛇を見てしまった自分も「明日まで命を延ぶべからず」と言っている。

(イ) 「他人のまたこれを見んことを恐れて、地に埋みける」という叔敖の言葉を聞いた母は、「天は高けれども、低き地のことをよく聞けり、徳は不祥に勝ち、仁は百禍を除く」と言って、叔敖を安心させている。

(ウ) 叔敖が他人のために「蛇をさへ埋むほど」の誠実な人だと知る民は、自分たちに対しても「偽りあるべからず」と思って叔敖を信頼している。

(エ) 他人のことを思いやって蛇を埋めた叔敖の行いと、盗人を殺さずに「くすり酒」を与えた穆公の行いに着目する。両者はともに、そのよい行いによって「国の民」の信頼や「五人の盗人」の働きという「陽報」を得ている。

口語訳

昔、孫叔敖という人が、幼少のときに、外へ出て遊んでいたところ、両頭の蛇という、二つ頭のある蛇を見た。日本でいう「日ばかり」という種類のものであった。そのときに、その子の母が、「あなたはどうしたわけで、このようにものも食べないで泣いているのか」と問うと、叔敖が、「今日私は両頭の蛇を見たので、明日まで生き延びられません」と答えたのを、母はもともと優れた人物であったので、他のことを聞き入れず、「まずその蛇はどこにいるのか」と尋ねた。叔敖は、「両頭の蛇を見た者は必ず死ぬと、日ごろから聞いておりましたので、他の人がまたこれを見てしまうことを心配して、土に埋めました」と言った。母は、この言葉を聞いて、「心配しなくてもよい、あなたは死ぬことはないでしょう。なぜなら、人としてよい行いをする者にはよいことがあり、天は高くとも、低い地のことをよく聞き、徳は災いに勝ち、思いやりの心は多くの災いを除く、ということなので、あなたが死ぬわけはなく、そればかりか楚の国で出世するだろう」と言った。成人して後に、母の言葉通りに令尹という役人になった。その国の民が、叔敖は他人を思って蛇を埋めるような人なので、嘘偽りのない人物だと言って、その言葉をよく信じた。

また、秦の穆公が、駿馬を失ったとき、五人の盗人が、この馬を殺して食べた。穆公は、五人を殺さないで、くすり酒をお与えになった。その後に晋と戦があった。その五人は、命を惜しまずに戦った。穆公は、「陰徳陽報を得るとは、まさにこのことである」と言った。

三

解答

(ア) 1　(イ) 4　(ウ) 3　(エ) 2　(オ) 3　(カ) 4

解説

(ア) 夢みていたパリにいながら「自分は、あの頃の夢の中で生きているのだろうか」と夢を実現した実感を持てないで不思議さを感じている重吉は、「まだ見果てぬ夢を見ているのだろうか」とフィンセントのことに思いをはせ、「『いちばん描きたいもの』を描き上げたとき…彼の夢がかなったといえるのだろうか」と思っている。

(イ) 「何をやってもからかわれたし、馬鹿にされた」日々を送ってきた忠正だったが、「どんなに苦しいことがあっても…この川に浮かぶ舟になればいい」と心に決めたことを、重吉にも語っていることに着目する。

(ウ) 自分が描きたいと思う絵を存分に描くようにという忠正の助言に対して、「突然、告げた」ことに注目。また、話を聞いた忠正が「フィンセントは…いつまでもパリにとどまりたいと願っている」「この街に…受け入れられないとわかってしまったから、出ていく決心をした」と気づいているように、アルルに行くと決めた今でもフィンセントがセーヌやパリに強い思い入れを持っていることから考える。

(エ) 「ほんとうはいつまでもパリにとどまりたい」が、それがかなわないフィンセントのつらい思いに気づいた忠正は、自分も異国の地でくやしい思いをし、しかし「流されることなく、沈むこともない」舟になればいいと決意したかつての経験をふまえ、フィンセントにも同じことを望んでいる。

(オ) 重吉は、忠正がフィンセントに告げた「セーヌに受け入れられないのなら、セーヌに浮かぶ舟になればいい」という言葉を聞いて、忠正とフィンセントが「夢」と真剣に向き合って苦悩していたと知ったことから考える。

(カ) 冒頭では「セーヌに架かる橋の真ん中に立っている」ことを不思議に思っていた重吉が、忠正とフィンセントの話を聞いた後で、「苦しみも、悲しみも、やるせなさも、すべて…芥に変えて、とどまることなく流れていた」と実感をもってセーヌ川を見ていることに着目する。

四

解答

(ア) 3　(イ) 2　(ウ) 3　(エ) 1　(オ) Ⅰ、主体的な意志　Ⅱ、責任の所在　(カ) 1　(キ) 2　(ク) 4

解説

(ア) Aでは、皆が「自らの価値を向上させて活躍できる時代が到来するかもしれない」という可能性に反して、「自分が『主人公』となって活躍しているという感覚は、単なる錯覚」になりそうだと推測している。Bでは、「アクションを起こす主体は自動車であり、人間は…客体になる」ことを、「主体と客体の関係が転倒するのだ」と言いかえている。

(イ) 「どこまでやってもゴールに到達することはない」クリエイティブな仕事に比べ、ルーティンワークの方が「負担は軽い」と述べている。

(ウ) 「あたらしい技術」は人間が主体的に「使うか否かを決める」道具ではなく、「既に、私たちと融合を始め」ており、「『ここにあるもの』として、私たちと一体化しつつある」と述べている。

(エ) 「『本当の』自動運転」において、「アクションを起こす主体は自動車であり、人間は…客体になる」と述べ、このことは「近代以降の社会の枠組み」にまで影響を及ぼすという問題を指摘していることから考える。

(オ) Ⅰ、「そうした枠組み」とあるので、前で述べている「近代以降の社会の枠組み」が、「人間は主体的な意志を持つ存在である」という前提を基につくられてきたことをおさえる。Ⅱ、「『自動』運転で事故が起こった場合、責任は誰が負うことになるのだろうか」という疑問に注目。刑罰は「個々人には自由意志がある」ことを前提に与えられているが、「あたらしい技術」によって事故が起きた場合、人間は「客体」となっており、「本当の『自動』運転の主体は…人間ではないので、現在の法律では対応できない」と述べていることをふまえて探す。

(カ) 「『あたらしい技術』がもたらす『あたらしい社会』」では「これまでの社会の枠組みや人間という存在そのもの」が大きく変わるので、「どんなに一所懸命に自らの『人的資本』の価値を高めようとしても、疲弊するばかりということになるだろう」と述べている。

(キ) 「これからの社会は変化せざるを得ないだろう」と指摘した上で、「『あたらしい技術』が社会をどう変えようとしているのか」を知り、その上で「どのように変わって欲しいのか、そのビジョンを思い描くこと」が重要だと述べている。

(ク)「あたらしい技術」の実現は「便利になった」ということにとどまらず「社会の枠組みや人間という存在そのもの」さえ変えてしまうものだと指摘した上で、「これまでの価値観ではやっていけない」時代を生き抜くためには「自分のことにだけ関心を向けるのではなく…社会との、あるいは物理的な環境や技術との関係をどのように築いていくかに、もっと目を向けることが必要なのだ」と訴えている。

五

解答

(ア) 4　(イ)(リサイクル率を向上させるためには、)紙製容器包装やプラスチック容器包装を分別して資源にする(ことが重要だと考えられます。)(27字)(同意可)

解説

(ア)「一般廃棄物の収集量と処理量の内訳」についてのグラフを見ると、「集団回収」量が五・三%。「収集後直接資源化」量は、「直接資源化」量の九・八%から、「集団回収」量の五・三%を引いた四・五%となっている。

(イ)「少しでもリサイクル率を向上させるために私たちにできることは何でしょうか」というAさんの言葉に対して、Dさんが「混ぜればごみ、分ければ資源」と指摘していることをふまえ、リサイクル率の低い「紙製容器包装」や「飲料用紙容器」「プラスチック容器包装」に着目する。